超　音　波　検　診

動　　向

40代・50代になると生活習慣から蓄えられた病気が現れてくる。このような病気を早期に発見し，生活改善や治療で対処することが大切である。超音波検診は，これらの年代での受診者の多様な所見内容で疾病を発見できる検査である。

画像診断の重要な一角を占める超音波検査の利点は，受診者に苦痛を与えることなく多くの情報を得ることが出来る点である。さらに，消化器系の肝臓や胆嚢の疾病に能力を発揮している。

産業保健分野における団体数及び受診者数は，**表1・2**に示したとおりである。平成13年度は団体数において前年度比88団体増の405団体であり，受診者数においても1,238名増の5,978名となり，平成８年度より続いていた減少傾向から増加へと転じた。次年度以降も増加傾向が続くかは推移を見つめる必要があるが，一部の健康保険組合において検診料の補助対象項目に加わる等の動きも見られる。

当協会では熟練した専門医の知識と経験をもとに生活習慣病健診などとの併用や有所見者の精密検査・フォローアップ指導を行っている。

方　　法

腹部超音波検査は可聴域外の音波（３～４MHz）を体外より体内に発射し，その反射を画像化する装置により得られる情報をもとに診断する画像検査である。この検査は，腹部の実質臓器（肝臓，膵臓，脾臓，腎臓），胆のう，腹部大動脈，さらにはリンパ節，胸腹水，膀胱，前立腺，腸管等腹腔内の種々な臓器の形状を把握することが可能である。検診では実質臓器，胆のう，腹部大動脈を主に対象として検査を施行している。

A．検査前の注意

① 前夜９時以降の飲食を避け午前中に検査を実施する。

② 午後に検査を行う場合には胆のう収縮を考慮して牛乳，卵，油物を避けて通常の半量の朝食を摂取し検査まで最低６時間の飲食を避ける。

③ 消化管のバリウム検査は数日前から実施しない。

④ 胃X線や胃内視鏡を同日に施行する場合は臓器の描出状態を考慮し超音波検査を先に行う。当施設では検査に先立って下剤等の薬物投与は行っていない。

B．検査の実際

① 受診者は背臥位で腹部を露出し，検査者は受診者の右側の装置に向かって座る。

② 腹部全体にゲルを広く塗布し，探触子を受診者の皮膚に密着させ腹部の臓器を観察しながら記録する。

C．判定

技師が画像をすばやく適接判断すると同時にフィルムに撮影し専門医とディスカッションしながらダブルチェックで最終判定を下している。

結　　果

平成13年度は平成12年度に比べ団体数，受診数ともに増加した**（表1）**。受診者数は総数，男性，女性すべてにおいて増加**（表1）**，健康診断，消化器検診の一部として認知されてきた感がある。年代別臓器所見数は脾臓を除き男性，女性ともに年代とともに多くなっている**（図A，B）**。脾所見は脾腫が若年者に多いことと関連している可能性がある。臓器別所見では肝臓，腎臓，胆のうに所見が多いが所見の内訳を見るといずれも大半は日常生活に支障のない所見（“心配なし”）で要受診，要精検症例は10～25%程度であった。膵臓においては平成12年度より開始した要精査判定は膵臓所見者229名中91名（男性81名，女性10名，48%）であり要受診判定32名（男性29名，女性３名，10.9%）と合わせると123名（男性110名，女性13名，65%）となり医療を必要とする者の割合が他臓器に比し有意に高かった。検診にはなじみにくいとされる膵臓疾患の積極的な追求は更に今後も必要であろう。

腹部超音波検診は疾患臓器及び所見内容が多岐に渡り一次元的な解析が困難ではあるが各論的に一つ一つ取り組むことにより精度向上のみならず各事業所，さらには受診者一人一人のバラエティに富んだニーズに対応し検診業務における新たな展開を目指したい。

関係の集計表は106～107頁に掲載